

<<口頭発表>> (9月16日 10:00-10:30)

【1号館(A棟)5F A501教室】

「手伝いの依頼に対する断り」表現における日本語・タイ語母語話者の意味公式使用の違い
—目上からの依頼に対する断りを中心に—

プーンウォンプラサート タニット

本研究では、日本語(JJ)・タイ語母語話者(TT) それぞれ100名の大学生を対象に手伝いの依頼に対する「断り」表現における意味公式使用の違いを明らかにすることを目的とする。談話完成テストとインタビューでデータを収集した。親疎関係と依頼の負担度により異なる4つの場面から構成されていた。分析は回答の発話内容を意味公式に分類し、意味公式の出現頻度とその割合を比較した。結果は1)90%以上のJJも TTも断る際に「理由」を述べているが、「直接的な断り」「謝罪」「代案提示」の使用は両者の間に大きな違いが見られる。2)JJは「直接的な断り」を多用している。一方、TTは避ける傾向が見られる。3)90%以上のJJは「謝罪」をする。しかし、TTはあまりしない。4)JJは「代案提示」をほとんどしない(10%以下)。しかし、TTは親しい人なら、「代案提示」をよくする。逆に親しくない人ならほとんど提示しない。

<<口頭発表>> (9月16日 10:35-11:05)

【1号館(A棟)5F A501教室】

なぜ不満を表明しないのか
—日本語とロシア語の不満表明の対照研究—

PROKOPEVA MARIIA

本研究では、日本語母語話者とロシア語母語話者が、特定の場面で不満表明をしない理由を調査し、両言語の異同を明らかにすることを目的とする。先行研究では、不満を表明しないことに関して、「何も表さない」という解釈、或いは、「不満表明とは関係のないことを発言する」という解釈の二つの解釈が論じられているが、なぜ不満を表明しなかったのかという側面が視野に入れられていない。調査の方法は六つの場面を設定した談話完成テストを採用し、調査の対象者は日露合わせて100人である。調査の結果、日本語は場面による不満表明の有無の差が大きく、それに対し、ロシア語はその差は大きくないことが分かった。両言語では、不満を表明するかしないかの行為は場面によって大きく異なり、言わない理由には文化の影響が現れた。しかし、異なる言語でも不満を表明しない理由が共通する場面もあることが分かった。

<<口頭発表>> (9月16日 11:10-11:40)

【1号館(A棟)5F A501教室】

マレーシア語会話における聞き手行動
—談話マーカ―「ね」「さ」相当語 *kan*周辺に注目して—

勝田 順子

マレーシア語会話において談話マーカ―*kan*は、日本語の談話マーカ―「ね」「さ」(いわゆる間投助詞)と類似した意味を保持する。*kan*周辺では、①聞き手の反応はあるか、また聞き手の反応の仕方はどのようなものであるか、②聞き手の反応がない場合、要因は何かを分析する。その結果、「文+*kan*」の「文」(文の途中までまたは最後まで)を聞いてから発される聞き手の反応は、うなずき(非言語的あいづち)でなされることが多い一方、「文+*kan*」の*kan*を聞いてなされる反応は、「言語的あいづち」他が多数(93%)を占めていた。これより、マレーシア語会話では、話し手の発話中に聞き手が発話することへの非選好があるのではないかと考えられる。次に、②「文+*kan*」の周辺で、聞き手の反応が見られなかった(35%)要因として1)話し手の話速が速く、聞き手の反応を求めているようには聞こえない、2)聞き手が特に知りたい発話内容である、という2点が考えられた。

<<口頭発表>> (9月16日 11:45-12:15)

【1号館(A棟)5F A501教室】

日本語学習者のスピーチ・レベルポライトネスの発達
—第二言語環境における英語母語話者の依頼, 勧誘, 謝罪の発話行為を対象に—

ボイクマン 総子, 森 一将

本研究では日本に滞在する英語母語話者の中級日本語学習者10名と上級日本語学習者10名を比較し, そのスピーチ・レベルを統計的に検証した. 依頼・勧誘・謝罪をロールプレイにより収集し, 依頼と勧誘はHead-actとそれ以外の発話(Others), 謝罪はIFIDとOthersにわけ, 分析した. 結果, (1)いずれの発話行為においても基調となるスピーチ・レベルは中級では不安定で上級は安定している, (2)負担の度合いによりサブ・スピーチ・レベルで差が生じるのは上級である, (3)上級では依頼と勧誘のHead-actはOthersよりスピーチ・レベルが高く, Othersにおけるサブ・スピーチ・レベルの比率も高い, (4)謝罪のIFIDの回数, 及び, IFIDのサブ・スピーチ・レベルの出現は上級の方が多い, ことがわかった. 以上より, スピーチ・レベルの安定した使い分けが可能なのは上級であること, 及び, サブ・スピーチ・レベルが中級と上級をわける発話能力判定の指標となることが示唆された.

<<口頭発表>> (9月16日 10:00-10:30)

【1号館(A棟)5F A502教室】

日本語母語話者と非母語話者の初対面雑談会話における国事情談話の相互行為分析

嶋原 耕一

日本語母語話者と非母語話者による接触場面の雑談会話では、「日本は…」や「日本人は…」という談話により、国を単位とする一般化が交渉されたり達成されたりすることがある。本研究では、当該談話の行為連鎖を分析し、各談話がどのように構成されているのか、明らかにすることを目的とした。そうすることで、どのような行為連鎖の中で当該談話が生起しているのか、そしてどのような行為連鎖の中でそれらの談話が構成されていくのかが、明らかになると考えた。発表では談話例を示しながら、その行為連鎖について詳しく論じたい。

<<口頭発表>> (9月16日 10:35-11:05)

【1号館(A棟)5F A502教室】

日本語の雑談における記憶に関する発話の分析と分類

千々岩 宏晃

本研究では、日本語の雑談中の記憶にかかわる発話と記憶への言及を含む発話を会話分析の方法を用いて分析、記述した。結果の3つの分類を試論として提案したい。1つ目は「忘れる」等の発話が、その対象自体を「重要ではない」こととして相手に示すものである。語りの初めに「いつかは忘れたんだけど」ということは、時間軸上の位置づけが重要ではないことを示す。2つ目は「覚えていないこと」が、「語り合うことができない」という参与枠組みの再組織化を行っているものである。評価の対象に対し「よく覚えていない」ということは、評価する権限がないことを示す。3つ目は、人名や場所の名前、語彙などが産出できないトラブルに対して、その周辺情報をヒントとして出すかどうかによって、2つの異なる連鎖が選択されうることを記述するものである。

<<口頭発表>> (9月16日 11:10-11:40)

【1号館(A棟)5F A502教室】

会話における「と文末」を用いた理解確認

陳 力, 横森 大輔

本研究は、「と文末」(助詞「と」が末尾に用いられた発話形式)を用いた理解確認の発話が相互行為においてどのように用いられているのか検討する。会話データから「と文末」による理解確認および「～ということですか」類による理解確認の事例をそれぞれ収集して分析した結果、前者については次の特徴が見出された。発話冒頭には「要するに」など直前の内容からの論理的帰結を導く談話標識が用いられ、内容的には直前の発話をパラフレーズすることが多い。そのため肯定的応答が強く期待されるものとして産出されており、結果として端的な肯定応答が、早いタイミングで返される。そして、連鎖はそれ以上拡張せず完結し、その前に進行していた活動の続きに戻る。総じて、「と文末」による理解確認は、相手の発話に含まれる特定の語句や言い回しの意味を確認するという局所的な課題のために用いられ、会話の中の副次的活動を構成する発話として利用されている。

<<口頭発表>> (9月16日 11:45-12:15)

【1号館(A棟)5F A502教室】

直接性と逼迫性の連鎖的再格付け
—米公聴会における応答追求手続きの会話分析—

岡田 悠佑

本研究は相互行為における「連鎖的再格付け」手続きの1つとして、米公聴会参加者が用いる直接性と逼迫性の再格付けによる応答追求の実践を明らかにする。これまで付け足しや指示対象の詳細化、個人化など異なる手続きとして扱われてきた相互行為内での応答追求の手続きを、特定の尺度における表現の再格付けとして再詳述することで、「特定の応答追求方法(表現)によりどのような意味が相互行為の連鎖構造の中で体系的に構築されるのか」、そして「その構築された意味が相互行為をどのように展開させるのか」、という2点を明らかにし、相互行為における意味構築手続きの解明を目指す会話分析研究への貢献を目指す。参加者間での応要求行為と応答を軸に相互行為が展開する米連邦議会で行われたタカタ製エアバッグ不具合問題の公聴会を調査対象データとし、証言者からの適切な応答を追求する中での議員の再格付け実践2事例への分析を披露する。

<<口頭発表>> (9月16日 10:00-10:30)
【1号館(A棟)5F A503教室】

鉄道の案内サインを考える
—北欧4か国の首都駅と東京—

岩田 一成

本発表の目的は、北欧の各首都駅を詳細に分析した上で、東京駅と比較することにより、案内サインの在り方を論じることにある。言語景観という分野で案内サインの研究はこれまでもあるが、本発表のように駅の案内サインという同一テーマで複数の都市を比較した研究はない。

オスロ・ストックホルムは、言語重視型で、案内する場所に関して、現地語と英語(英語はオレンジで色分けされている)が併記されており、その後にピクトグラム(イラスト記号)が付いている。ヘルシンキ・コペンハーゲン は、ピクトグラム重視型と言える。最初にピクトグラムを提示して、後から言語情報が追加されている(ピクトグラムのみで言語情報がないこともある)。東京駅は多言語化の方針であり、北欧とは発想が異なる。北欧各首都駅にあって東京駅にはないアイデアとしては、外国語部分を色分けする発想、文字情報を減らしてピクトグラムを重用する発想の2点である。

<<口頭発表>> (9月16日 10:35-11:05)

【1号館(A棟)5F A503教室】

公共サインの客観的評価のための試み
—英訳にあらわれた「ズレ」からそれを探る—

本田 弘之, 倉林 秀男

日本の公共サイン(看板, 掲示物)の中には, 「ていねいすぎる」「表現がまわりくどい」などと評されるものが少なくない。しかし, 日本語の枠内から観察している限り, どの程度「ていねいすぎる」のか客観的に論じることが難しい。

本発表では, サインに併記された日本語と英語を比較し, 翻訳の際に生じた「ズレ」に着目することにより, 日本語の公共サインの表現を客観的に評価することを試みた。

翻訳のズレは大きく二種類に分けることができる。それは, [1]文法, 語彙項目の差異があらわれたケースと, [2]日本語的な表現を直訳, あるいは, 日本的ポライテネスが表現されている部分を／も英訳したために奇妙な表現になってしまったケース, である。

このとき英語表記がなぜ奇妙に感じられるのか, を分析することによって日本語の公共サインの表現を客観的に論じる方法を探る。さらに「日本語的ポライテネス」の特徴を客観的に示すことを試みる。

<<口頭発表>> (9月16日 11:10-11:40)

【1号館(A棟)5F A503教室】

韓国におけるデパート店内の店舗名について
—ファッション系の店舗を中心に—

持田 祐美子

本研究は韓国における商業的な言語景觀について調査・考察したものである。

調査の結果、明らかになったのは以下の3点である。①どのデパートにおいても国内ブランドの店舗名は外来語(非韓国語)が多い②韓国語由来の店舗名であっても、表記はほぼアルファベット③国内ブランドの外来語の店舗名は英語が6割強であり、8割以上が欧米系言語

上記の結果から、韓国の外来語に対する意識や、英語の市場価値の高さについて明らかになった。また、欧米系言語の採択とともに国内ブランドにおける欧米系モデルの起用についても考察を行った。その結果、“欧米っぽさ”が高級感や非日常感をかもし出し、欧米系言語の採択や欧米系モデルの起用が、高級感や非日常感をかもし出すために有効に働いていることが分かった。

また、最近の韓国における言語景觀の動向と日本との比較をしたが、日韓とも外来語・外国語に対して「新鮮さ減退」が起こっていることが分かった。

<<口頭発表>> (9月16日 11:45-12:15)

【1号館(A棟)5F A503教室】

名詞句と名詞句のみの組み合わせの新聞見出し

劉 吉香

新聞見出しは限られた字数で、簡潔にしかもなるべく誤解を与えないように記すため、通常の文と違う表現形式が多く見られる。従来の研究は見出しの量的構造や助詞の省略や止め方などについて論述するものがほとんどである。本発表は、読売新聞社のデータベースを利用し、新聞の主見出しの実例を収集し、考察対象としている。問題にしているのは、その見出しが、名詞句と名詞句の組み合わせのみであっても、そのような見出しから何らかの事態が推定・理解する場合、私たちはどのような情報を手がかりにしているのだろうか。それを考えることが本発表の目的である。

<<口頭発表>> (9月16日 10:00-10:30)
【1号館(A棟)6F A603教室】

会話にみる“社会知”
—英語の列挙表現とそのプロソディー—

穂元 美咲

会話中には無数の相互行為の資源が存在している。しかしその選択については未だ明らかにされていない。本研究では、参加者が相互行為の資源を選択する際、無数の選択肢の中から、その場面ごとに新たに選ぶだけでなく、ある言語形式と相互行為の資源の一種である特定の非言語的要素が“ゆるく”結びついたものを選択しているのではないかと考える。つまり特定の言語形式とそこに頻繁に付与される特定の非言語形式の間には“文法”のような関係性が成立していると想定する。英語の会話に現れる列挙表現とその特徴的なプロソディーの結びつきをある種の“文法”と捉え、その相互行為的效果を想定し、参加者らが互いに共有することで会話の運用を行っていることを明らかにする。さらに、その広義の文法は、視線などの追加の相互行為の資源を活用することでその効果を強化することが可能であることも検証する。

<<口頭発表>> (9月16日 10:35-11:05)

【1号館(A棟)6F A603教室】

認知環境を考慮した臨床での「医療用語の説明」についての一考察
—関連性理論の観点から—

神田 千春

本研究の目的は、専門性の高い医療用語からなる医療情報を、患者がどのように理解していくのかについて探ることにある。医療者としての経験から、医療者は医療用語を用いて発話するのに対し、患者は日常用語でそれを解釈しようとするギャップが、患者の理解を妨げる要因の1つであると考えられる。『病院の言葉を分かりやすく』(国立国語研究所:2009)では、患者に心理的負担がある場合には「個々の言葉ごとに考えるのではなく別の視点や方法による検討が不可欠」としている。しかし、臨床の場では患者には心理的負担が在るのが常態であり、それによる受信能力の変化にその場で対応する必要があると考える。そのため関連性理論の観点から仮定を設定し、会話例の中の医療用語について分析を試みた。その結果、コンテキストが経時的に変化する言葉に対応する必要があること、患者の認知環境に応じて患者が思考する日常用語での説明が必要であることなどが示唆された。

<<口頭発表>> (9月16日 11:10-11:40)

【1号館(A棟)6F A603教室】

インバウンド・コミュニケーションにおけるスタンステーキングの分析
—バフチンの対話原理の視点から—

高梨 博子

インバウンド観光振興は、未知との出会いの中で、言語など意思疎通での不安が大きく、外国人の慣習や価値観を踏まえたコミュニケーションのあり方が課題である。本研究は、こうしたインバウンド観光の特徴を抽出したうえで、バフチンの対話原理で示される「ポリフォニー」「クロトポス」「カーニバル」といった概念を発展的に適用し、相対的かつ間主観的に形成される動的な対話行為の特性を提示し、現場へのフィードバックなど社会的貢献を目指すものである。

本研究では、米国カリフォルニア州のビクターセンターで、エスノグラフィーの手法により、2017年にフィールドワークを実施し、フレームの変化に伴う「ユーモアや遊び」等を用いた親近感の醸成、役割を超えた対話の発展の状況等を確認した。

今後は、日本を含めた国・地域別や属性・旅行形態別等の類型分析の蓄積や分野横断的な研究融合が課題である。

<<口頭発表>> (9月16日 11:45-12:15)

【1号館(A棟)6F A603教室】

英語による議論コミュニケーションに見られる主導権獲得や放棄について
—日本語母語話者と非日本語話者との比較—

春木 茂宏

本研究では、日本人大学生と外国人大学生の混合グループにおける英語による議論コミュニケーションを会話分析の手法を用いて分析し、議論における主導権の獲得・譲渡・強化・弱化を中心に以下の3点を明らかにする。(1)外国人大学生は自己の主導権の強化や明示(議論主導権の付与, 次の話者選択, 議論内容の重要性判断など)と他者の主導権の弱体化(他者意見批判など)を積極的に行っていたが, (2)日本人大学生は自己の主導権の弱体化や放棄につながる発言(議論主導権管理行為への追従追認など)を行う一方で, 他者の主導権を弱体化させる発言をしていなかった。(3)日本人大学生が従う合意の上で議論をしようとする協働的相互作用フレームが外国人大学生の競争的相互作用フレームに通用せず, 主導権を獲得するのが難しくなる。最後に, これらを踏まえて, 日本人大学生の議論能力を向上させる教育的提案にも触れる。

<<口頭発表>> (9月17日 09:30-10:00)

【1号館(A棟)5F A501教室】

介護分野の外国人技能実習生に求められる日本語能力はいかに議論されたか
—厚生労働省有識者検討会を題材に—

布尾 勝一郎

2017年度から、外国人技能実習制度に介護職種が追加される。介護は、同制度としては初の対人サービス職種でもあり、日本語による伝達の失敗が利用者の生命に危険を及ぼす可能性もあることから、特に日本語能力が重視されている。

厚生労働省は、有識者検討会「外国人介護人材受入れの在り方に関する検討会」を開催し、2014年10月から2015年1月にかけて、外国人技能実習制度に介護職種を追加する場合の条件や日本語要件について検討し、「中間とりまとめ」を公表した。それに基づき、介護分野の技能実習生が日本に入国する際の日本語要件は、日本語能力試験「N4」程度、1年目の実習を終え、2年目の実習に移行する際には、同「N3」程度と決まった。

本発表では、有識者検討会の議事録を分析することで、どのような議論を経て技能実習生の日本語要件が決まったのかを検討し、言語政策の観点から問題点を明らかにする。

<<口頭発表>> (9月17日 10:05-10:35)

【1号館(A棟)5F A501教室】

儀礼のポエティクス
—メラネシア・フィジーにおける儀礼スピーチの言語人類学的考察—

浅井 優一

儀礼は、社会文化研究一般において、常に重要な研究対象となってきた。とりわけ、儀礼で使用される言語や詩的言語に焦点を当てた研究は、ハイムズやガンパーズによって打ち出された「ことばの民族誌」、デニス・テッドロックやポール・フリードリックによって着手された「エスノ・ポエティクス」によって担われてきた。これら一群の研究は、儀礼スピーチの研究として展開し、儀礼を相互行為のジャンルやパフォーマンスとして捉え、呪術的・超自然的と言える力や社会的権威を、儀礼が喚起する言語的メカニズムを明らかにしてきた。本発表では、このような言語人類学的研究に依拠し、南太平洋のフィジーで行われている伝統儀礼を取り上げ、そこで為される儀礼スピーチがどのようにして当該社会における呪術的、超自然的な力とされる「マナ(manā)」を喚起する発話となっているのか、それがどのようにして社会文化的権威と結び付いているのかについて考察する。

<<口頭発表>> (9月17日 10:40-11:10)

【1号館(A棟)5F A501教室】

関西若年層のカジュアル談話にみる「方言主流社会」的現象

上林 葵

関西方言話者の言語行動のイメージとして「どこでも誰に対しても方言を押し通す」という通説が世間一般に存在しているように思われる。しかし近年の関西出身の若年層の中には、友人同士のカジュアルな場面であっても相手によって共通語形式と方言形式をカテゴリカルに切換えるといった言語使用を行うケースがしばしば観察される。本研究はカジュアル度を固定した異なる2場面における関西出身若年層のことばの切換えに着目し、他地域と比べると方言使用が優勢とされてきた従来の関西方言話者の実態とは異なる、若年層の新たな言語運用の在り方を提示する。そこから、近年の一部の関西若年層の言語使用が方言内部での使い分けを重視する従来の「方言中心社会」的使用から、共通語と方言の使い分けを厳密にする「方言主流社会」的使用へと変化しつつあることを指摘する。

<<口頭発表>> (9月17日 11:15-11:45)

【1号館(A棟)5F A501教室】

第二言語習得論から見たウチナーヤマトゥグチの分類

新垣 李加子

ウチナーヤマトゥグチは沖縄の伝統方言を母語とする人たちが標準日本語を学んだ結果形成された、中間言語的特徴を持つ言語体系である。本研究では、第二言語習得論の観点からウチナーヤマトゥグチの再分類・再分析を行った。注目したのはその項目の起源(沖縄方言・標準日本語・西日本方言)と、その項目ができた過程である。沖縄方言起源の項目には母語干渉によりできた「はず」があり、標準語起源の項目には過剰般化によりできた「きれかった」などがある。分析の結果、外国人が日本語を学ぶ際に起きる現象や、沖縄以外の日本各地で起きている言語変化現象との共通性があることが分かり、ウチナーヤマトゥグチ研究へ新たな見方を提示することができた。

<<口頭発表>> (9月17日 09:30-10:00)

【1号館(A棟)5F A502教室】

Q.「白い恋人」と「面白い恋人」は似ている？それとも似ていない？
—日米における商標の類否判断基準の一考察—

五所 万実

和解に終わった商標権侵害訴訟「白い恋人vs.面白い恋人」事件。果たして両商標は互いに似ているのか否か。本研究は、言語学における実社会への貢献のあり方を示す一研究として、商標登録の審査過程や商標権侵害において問題となる商標の類似性について言語学的観点から考察するものである。二つの比較する商標が類似あるいは混同するか否かの判断は、視覚的・聴覚的な情報や、想起される意味合い等を総合的に勘案して行われるため、特に文字商標の類否判断においては、形態論・音韻論・意味論等の言語学的知見が重要となる。さらに本研究では、日本とアメリカにおける商標の類似性が争点となった審決・判決文を比較考察し、商標権をめぐる問題においては、言語的要素に加え、商標が使用される国の社会的背景や一般的価値観、さらにはジェンダー等の文化的要素が影響することを示したい。

<<口頭発表>> (9月17日 10:05-10:35)

【1号館(A棟)5F A502教室】

日本在住英語母語話者の「所有を表わす英語表現」とソーシャルネットワーク

平野 圭子

本研究の目的は日本在住英語母語話者コミュニティ内の英語方言接触によって誘発される言語のバリエーションと変化を「所有を表す英語表現」(HAVE GOT, HAVE, GOT)に焦点を当て調査し、言語的アコモデーションにおける話者のソーシャルネットワーク(Milroy 1980)の影響力を考察することにある。方言接触の初期段階における文法バリエーションと変化のメカニズム、また個々の話者のネットワークの特徴とその話者の言語行動の関係を考察する。3ヶ国の英語圏の英語母語話者から来日直後と一年後の二度にわたって計34時間の自然談話を収集し、約1200個の「所有を表わす英語表現」を採取・分析した。「所有を表わす英語表現」の使用には話者の出身国グループによってコンバージェンスとダイバージェンスの両方が見られ、個々の話者に観察される言語変化は話者個人のソーシャルネットワークと密接な関係のあることが判明した。

<<口頭発表>> (9月17日 10:40-11:10)

【1号館(A棟)5F A502教室】

英語非母語話者間の会話にみられる「笑い」の機能
—連鎖分析の観点から—

花元 宏城

本研究は、英語非母語話者間の会話にみられる「笑い」の機能をデータ解析によるemicで質的に探ることを通し、相互行為場面でのマルチモーダルリソースの重要性を明らかにすることを目的とする。連鎖分析 (sequential analysis)によると、彼らは、笑い、を修復の一つの方略として利用していることが明らかになった。つまり、聞き手が話し手の意図を理解していないと察知した場合、話し手は常に、言語的な修復 (repetition, clarification requests, comprehension checksなど) 手段を用い、聞き手に意味交渉を行うのではなく、非言語的リソースである、笑う、という行為で聞き手にcovert display of repairを行っていることが明らかになった。このことから、対話内での、笑い、は無秩序に生じている訳ではなく、相互理解への相互行為現象であると考えられ、このことは、対話参加者は協同的に対話を形成していることを示している。

<<口頭発表>> (9月17日 11:15-11:45)
【1号館(A棟)5F A502教室】

日本語学習者の「ほめ」談話
—「ほめ手」の方略に注目して—

古田 朋子, 早川 杏子

「ほめ」は相手に肯定的な評価を伝える言語行動であり、人間関係を構築する上で重要な役割を持つとされる。したがって、「ほめ」を適切に運用できることは、日本語学習者(以下、学習者)にとっても有益であると言える。しかし、学習者の「ほめ」に関する研究は限られており、いまだ、その特徴が捉えられているとは言い難い。本発表は、学習者の「ほめ」行動の特徴を、自然会話に近い形で採集した、学習者の談話を用いて、以下の観点から明らかにしたものである。第1に、相手の何に対して「ほめ」を行う(ほめやすい)傾向があるのか。また、その表現形式にはどのような特徴が見られるのか。相手に対する配慮はどう示すのか。第2に、「ほめ返答」はほめられる対象によって異なるのか。この2点を日本語母語話者と比較する。その上で、受け手によって「ほめ」が否定された場合に、「ほめ手」がどのような方略を用いて談話を終結させるのかについて考察する。

<<口頭発表>> (9月17日 09:30-10:00)

【1号館(A棟)5F A503教室】

リライトによって情報はどのように圧縮されるのか
—NHKニュースからNHK NEWSWEB EASY／ステージへ—

打浪 文子, 岩田 一成

本発表では、2012年4月から2014年3月までにNHKニュースのウェブサイトに掲載された25件(以下NHK)を元記事とし、それらに基づきリライトされた外国人向けの「やさしい日本語」のニュース「NHK NEWSWEB EASY」25件(以下EASY)と、NHKを知的障害者向けの「わかりやすい情報提供」である「ステージ」の編集過程と同じ方法でリライトした25件(以下STAGE)を比較し、リライトによって情報がどう圧縮されるかに着目して共通点・相違点を分析した。

それぞれの文字数はNHK 17, 201, EASY 11, 360, STAGE 7, 845で、STAGEは元記事の半分以下に圧縮されていた。さらに固有名詞に注目して質的に分析したところ、人名、組織名、地名のすべてにおいてEASYよりもSTAGEの方が平均出現数が低く、STAGEの方が大幅に圧縮されていた。また、EASYもSTAGEも共通してリライトの際の圧縮方法にパターンが存在することを明らかにした。

<<口頭発表>> (9月17日 10:05-10:35)

【1号館(A棟)5F A503教室】

中世騎士社会に登場した社交のための新時代の「スタイル」
—中英語頭韻詩に見られる「論争形式の歓談(daliaunce)」と他種の会話様式—

遠山 菊夫

本発表は、話しことばのスタイルに関する歴史社会言語学の論考である。話し手は、コンテキストによって会話のスタイルを使い分ける。そのために‘small talk’, ‘argument’, ‘flirting’などの会話のさまざまな「サブタイプ」が現代英語では発達している。それらの発展を辿る通時的研究の第一歩として、中英語頭韻詩に見られる‘daliaunce’ (論争形式の歓談)という会話の様式に焦点を当て考察する。話し手が意図的に演出する「遊戯としての対立」を明確にするための「ポジティブ・ポライトネス」および「論証のあや」に係わる表現が、この様式を特徴付けるマーカーであることを‘debat’ (真剣な論戦)という他種との比較を通じて明らかにしてゆく。当時の食事や身だしなみのスタイルとの並行性も視野に入れ、ノルベルト・エリアスの文明化論に基づいた歴史社会学的視点の導入によって、中世騎士社会の相互行為の特質を炙り出す。

<<口頭発表>> (9月17日 10:40-11:10)

【1号館(A棟)5F A503教室】

中国朝鮮族言語使用・意識の共通性と多様性
—延吉市と大連市のアンケート調査結果比較—

新井 保裕, 生越 直樹, 孫 蓮花, 李 東哲

これまでの朝鮮族研究は、延辺朝鮮族自治州に在住する者を対象とすることが多かったが、人々の移動が活発化した昨今、朝鮮族の在住地域、出身地域も多様化し、彼らを取り巻く環境も、それに伴う言語使用・意識も異なり得る。そこで本研究では、朝鮮族の古くからの居住地として知られる吉林省延辺朝鮮族自治州延吉市と、朝鮮族の新たな居住地として知られる遼寧省大連市を対象に言語使用・意識、その背景を探る。両都市において「学校」を共通のフィールドとしアンケート調査を行い、合計1007名のデータを計量分析した結果、延吉市と大連市の朝鮮族共に、女性は朝鮮語の中でソウルのことばを志向し、男性は中国語を志向するという共通性があることがわかった。一方でその程度は地域によって異なるという多様性が見えた。社会化の度合いや都市度の異なりが朝鮮族の言語使用・意識の多様性を生んでいることが示唆される。

<<口頭発表>> (9月17日 09:30-10:00)

【1号館(A棟)6F A603教室】

Japanese attitudes towards Japanese English: Language variety and in-group bias

Taro Awano

In current study, Japanese attitudes towards Japanese speakers of English, the effects of language varieties and spoken contents are investigated. By asking Japanese students to listen to guises spoken in English by Japanese speakers and evaluate those guises, Japanese attitudes towards speakers are researched. Also, two different spoken contents are used to investigate the effects of spoken contents and to see the correlation between language varieties and spoken contents. The results showed that Japanese university students tend to evaluate native-like English speakers more positively than katakana English speakers for competence. However, there was no significant difference in evaluations for sociability. In-group bias could be seen in some of evaluation. When native-like English speakers criticize introducing English in elementary school, they were evaluated as more convincing. Evaluations for competence was same tendency as shown in previous research, but sociability was evaluated differently from previous studies.

<<口頭発表>> (9月17日 10:05-10:35)

【1号館(A棟)6F A603教室】

The use of connectives in Japanese-English bilingual children's elicited narratives

Mishina-Mori Satomi, Nagai Yuki, Yujobo Yuri Jody

The current study examines if Japanese-English bilingual children growing up in the Japanese context tell stories in each language in language-specific ways in terms of connecting events. 11 nine- to thirteen-year-old Japanese-English bilinguals who regularly use the two languages in their daily lives told stories based on a wordless picture book in Japanese and English separately. We analyze if children use connectives denoting adverse and causality relationship more often in their English narratives compared with their Japanese stories. The results reveal that English narratives tend to have more expressions of causality and adversity compared with their Japanese narratives, but only in the older children over twelve years of age. The results suggest that language-specific patterns of connecting events start to reveal around teenage, and that children are able to acquire differential styles of describing events in both the socially dominant and non-dominant language.

<<口頭発表>> (9月17日 10:40-11:10)

【1号館(A棟)6F A603教室】

外国につながる生徒の自発的発話に見る教室参加
—地域日本語教室の場合—

孫 美那

本発表の目的は、地域日本語教室に通う外国につながる生徒の自発的発話とその文脈から彼ら自身の教室参加と位置づけ(Lave and Wenger 1991; Goffman 1981; Davies and Harré 1990)を明らかにすることにある。調査は、外国につながる生徒が高校進学を目指し勉強している地域日本語教室を対象に、参与観察と参加者への半構造化インタビューを行い、さらに6回の授業の録画・録音を行った。分析結果、生徒6名は、自発的発話が多いグループと少ないグループに分かれ、授業参加の形と位置づけに違いが現れた。具体的には、積極的に参加を現す事例や授業に参加しない様子を現すことで自身の日本語が上達していることを主張する事例等があった。このような教室参加には、出身国で置かれていた教育環境、日本での位置づけに対する志向が影響していることが示唆された。

<<口頭発表>> (9月17日 11:15-11:45)

【1号館(A棟)6F A603教室】

会話における割り込み後の談話展開に関する一考察
—中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—

陳新

本発表では、会話における割り込み後の談話展開に注目し、中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較分析を行った。分析に用いたのは中国人上級学習者(CNS)5名と友人関係にある日本人(JNS)4名、韓国人上級学習者(KNS)5名との2場面10組による自由会話、合計200分の会話データである。会話データを分析した結果、CNSが割り込んだ後、相手言語接触場面では、割り込まれた話者(JNS)が割り込み発話に応じた後にターンを取り戻して中断された発話を継続する、あるいは割り込んだ話者(CNS)と協調的に一つの発話を構築するという傾向があるのに対して、第三者言語接触場面では、割り込まれた話者(KNS)が割り込み発話に配慮せずに直ちに中断された発話を継続して自分のフロアを維持する、あるいは割り込んだ話者(CNS)がターンを取る、または会話参加者両者(CNSとKNS)が競争的に各自のフロアを継続するという傾向があることが分かった。